令和元年度１０月分　自治医科大学附属病院　事後検証結果報告

１　開催日時　令和元年度１２月１６日（月）１４時００分～１６時３０分

２　場　　所　自治医科大学教育研究棟２階大教室５

３　検証医師　間藤教授、新庄医師

４　出席者

(１)　消防機関

　　　 石橋消防６名、小山消防１２名、芳賀消防１３名、筑西消防９名　那須消防２名

　(２)　医療機関等

　　　 県医療政策課　１名　県南健康福祉センター　１名

福田記念病院　１名 精神保健福祉センター　１名

５　検証内容　ＣＰＡ及びロード＆ゴー　 ８件

　　　　　　　搬送困難症例対象症例　　　２件

　　　　　　　精神科症例　　　　　　　　４件

【検証結果】

①　250㏄バイクの単独事故で50歳代の男性運転手が負傷した。負傷者は腹臥位。下腹部の圧痛及び上背部に打撲痕があり、痛みのため腹臥位にできずに腹臥位でスクープストレッチャーを用いて搬送。腹腔内臓器損傷及びフレイルチェスト疑いでL&Gで活動し三次医療機関に搬送となった症例。

・無理にフレイルチェスト等の言葉は使わず肋骨の多発骨折と伝えても良い。

②　普通乗用車が民家の壁に衝突した単独事故で運転手の４０歳代の男性が負傷した。傷病者は道路上で仰臥位、意識レベルJCS300のため高度意識障害でL&Gで活動し三次医療機関に搬送となった症例。

・意識障害の鑑別として搬送中に血糖の測定を実施しても良い。

③　６０歳代男性、強直性けいれん及び意識障害を起こしているところを家族が発見し救急要請したもの。接触時ＪＣＳⅡ－１０、意識障害の鑑別のために現場で血糖測定したところ血糖値は２５ｍｇ／ｄｌ。低血糖のため、車内にて静脈路確保後にブドウ糖１投目投与中、意識レベルがＪＣＳⅠ－１まで改善したため、医師に２投目の投与の相談をしたところ２投目中止の指示を受け中止する。その後、直近医療機関に収容依頼、搬送先医師より血糖を再測定するよう指示があったため、血糖を再測定した症例。

・ブドウ糖１投目投与して意識レベルが改善しても、インスリンを使用している傷病者

　の場合、すぐに血糖が下がる可能性もあるので２投目を投与しておくのもよいのでないか。

・血糖の再測定については、ブドウ糖投与してあまり時間が経たずに測定しているので、数値が高値になってしまう可能性がある。投与から１０分前後経過して容態変化がなければ、その時に測定するのが良いのではないか。

④　高血圧症及び糖尿病を患う８０歳代女性が午前中より腹痛を訴える。時間の経過とともに症状が悪化、痛みの増強や意識障害がみられたため、家族が救急要請した。

　　　接触時の身体所見から循環血液量減少性ショックと判断し、車内にて静脈路確保を実施、急速輸液の指示にて輸液を行う。輸液実施後の血圧において改善がみられたが急速輸液のまま搬送した症例。

・傷病者の血圧は改善がみられたものの、意識状態など、改善傾向がみられず、いまだショックが落ち着いたとは判断できないため、急速輸液から維持輸液への変更は必ずしも必要でない。

・輸液速度変更にあっては、傷病者の状態や搬送時間などを考慮して指示要請をおこなうこと。

⑤　８０歳代女性、尿路感染症（ショック徴候あり。点滴処置あり。）の患者を管内の一次医療機関から管外の三次医療機関までの転院搬送。現場出発し約２分後、傷病者の

体動で点滴が抜針してしまった。転院元医療機関での再処置を考慮し、直ちに転院元医療機関へ連絡するが応答なし。搬送先三次医療機関に連絡し、転院元医療機関には立ち寄らず搬送継続の指示を受けたが、搬送中ショック状態となりショック輸液適応となった症例。

・事故防止に留意し活動すること。

・転院搬送では転院先医療機関に到着するまでは、原則、転院元医療機関が責任を持つこととなっているが、搬送中に重大な問題、事故が発生した場合、責任の所在を明確にしておかなければ、裁判等になった場合救急隊の責任も問われかねないので、今後の課題として消防本部及びMCにおいても各医療機関へ、医師、看護師が同乗しない場合においての問題発生時における説明、注意喚起等を検討して行く必要がある。

⑥　８０歳代女性、老人ホームで食事中、蒸しパンを喉に詰まらせ呼吸困難となり救急隊到着前にCPA状態となっていたもの。咳をして苦しがっているとの救急要請内容でもあったが、CPA移行を考慮できず、事前管制、救急支援及びCPAへ容態変化した時の口頭指導がなされなかった。現場でCPAを確認した救急隊が異物除去後、気管挿管及び薬剤投与を実施した症例。

・通信指令課が１１９受信時において通報者から情報を聞き出し、CPAに移行する可能性が高いものに関しては救急支援出動や適切な口頭指導、事前管制を行っていくべき。

⑦　８０歳代の男性、本日（10/6）１１時３０分頃、隣人宅の庭で自己転倒。転倒時、近くに設置してあるプロパンガスに左肩をぶつけ救急要請。救急隊接触時、隣人宅で座位。　左肩痛を訴える。意識ＪＣＳ０、転倒時に意識消失（-）、転倒時に前駆症状（-）呼吸音左右差（-）車内収容、直近二次医療機関に連絡し搬送。直近二次医療機関に収容し、ＣＴ検査後、皮下気腫を確認。意識レベルの低下を伴い三次医療機関に転送となる。点滴処置及び酸素３ℓ投与し搬送。病院到着前に奇異性を呼吸確認した症例。

・二次医療機関に搬送し三次医療機関に転送でも良いのでずが、処置内容によっては、三次医療機関への搬送を考慮すること。

・血圧低下やspo2値が保たれないのであれば酸素投与量を上げること。

・転送元の医師及び看護師、救急隊で検査や処置内容を確認し情報共有を行うように。

⑧　５０歳代の男性、（10/21）１２時５５分覚知、外出し帰宅途中に呼吸苦発症。帰宅後、母親から救急要請。救急隊接触時、玄関内で座位。呼吸苦を訴える。意識ＪＣＳ０両肺　　喘鳴（+）　傷病者が大柄のため、バックボードで車内収容。頻呼吸（+）頻脈（+）血圧212/144、spo2が７０％のため酸素濃度10ℓ投与。二次医療機関に連絡し搬送。搬送中spo2値が改善しないため補助換気へ切り替え病院に収容。収容後、検査により、左脚ブロック確認し、三次医療機関に転送となる。補助換気は継続実施。点滴処置実施し、容態変化なく三次医療機関へ搬送した症例

・直近二次医療機関に搬送後の転送でも良いが、病院で何が出来るかが肝心なところ。

・直近二次医療機関に搬送し病院での的確な処置が施された良い症例でした。

６　搬送困難症例

①　駅で３０歳代の男性が列車と衝突した事故で救出に時間を要した症例。

（重症以上　現場滞在時間３１分）

・活動に問題なし。

　②　８０歳代男性、ベッド上でＣＰＡ状態で発見されたもので、事前管制で３件断られた

症例。

（重症以上、医療機関照会４件）

・活動に問題なし。

【精神科症例】

①　パニック障害既往の７０歳代女性が過換気及び手足のしびれを訴えた症例。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（現場滞在時間２１分、医療機関照会１件、軽症）

・活動に問題なし。

②　８０歳代女性、自宅内で睡眠導入剤を多量に飲み自損行為した症例。

　　　　　　　　　　　　　　　　　（現場滞在時間２７分、医療機関照会２件、中等症）

・活動に問題なし。

③　うつ病、パニック障害既往の５０歳代女性、不安感を訴え救急要請した症例。

　　　　　　　　　　　　　　　　　（現場滞在時間１３分、医療機関照会１件、軽症）

・活動に問題なし。

④　うつ病、統合失調症既往の４０歳代女性、当日かかりつけ医で処方された薬を多量に飲み自損行為した症例。

　　　　　　　　　　　　　　　　（現場滞在時間３７分、医療機関照会５件、中等症）

・活動に問題なし。

※　次回の検証会は令和２年１月２７日　１４時から